
いちばんうしろの聖杯戦争

A・オリゼー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いちばんうしろの聖杯戦争

【Nコード】

N3555T

【作者名】

A・オリゼー

【あらすじ】

西暦三千年を超えた魔術全盛期の時代

魔王となった紗伊阿九斗はキャスターのクラスで召喚される

マスターは衛宮と名乗る前の頃の赤毛の少年、士郎

第四次聖杯戦争に魔王参戦

召喚（前書き）

初投稿になるので誤字脱字その他もろもろあると思いますが、よろしくお願いいたします

召喚

「閉じよ閉じよ閉じよ閉じよ。繰り返すつどに四度 あれ、五度？ えーと、ただ満たされるトキをー、破却する……だよなあ？ うん」

鼻歌交じりに鮮血を用いて魔法陣を描きながら、雨生龍之介は召喚の呪文を暗唱していた。ことの始まりは龍之介が自宅の蔵で古文書を見つけたことだった。

その古文書の内容が西洋オカルトの類で、その中にサタンに対する記述があり、それが三十以上殺人をしてきた龍之介の心を刺激した。

そしてつい先程も就寝中の一家を襲った所である。

「閉じよ閉じよ閉じよ閉じよつと。はい今度こそ五度ね。オーケイ？」

そして一人殺さず残しておいた少年の顔を見ながら尋ねかける。

「ねー坊や、悪魔って本当にいると思うかい？」

そんな問いかけを龍之介がしていると、締め切った屋内では有り得ない程の風が吹き、鮮血の魔法陣が輝き、龍之介の手に蛇の刺青が浮き出た瞬間、黒い輝きを纏った男の姿があった。

背負うのは、黒いぎらついた光の羽。

盛り上がった、しかし禍々しく変容した筋肉の巻き付いた肉体。

残虐の笑みとそこから覗く牙。

煌々と赤く輝く目。

悪魔と呼ぶよりも魔王と言った風格の男はぐるりと屋内を見渡し顔をしかめる。大方の起きていたことが理解できたのだろう。

「カッケー、Coolだ ガッツ!!」

現れた男の様子に興奮した龍之介が興奮した瞬間目に見えない万力のような力で龍之介が磔られる。

「全く召喚されてそうそうこれなんて僕でもそろそろ気が滅入りそうだ」

そう言いながら、男がグツと拳を握るとゴキツと鈍い音がして龍之介の首が捻れた。

男は倒れている少年の猿轡を外してやると、尋ねる。

「君の名前は？」

少年は恐る恐る一郎と答え、そしてあなたは悪魔何ですかと問いかける。

それを聞いた男は苦笑しながら答える。

「僕は魔王なんだ」

魔王、紗伊阿九斗第四次聖杯戦争参戦

召喚（後書き）

ブローグなので短めとなりましたが、指摘やアドバイスなどくださると幸いです

意志（前書き）

前回長くすると書いたのに未だ説明回ゆえ短い

次回こそ他のキャラを出してみせるつもりです

意志

翌日、士郎が目を覚ます。キョロキョロと周りを見渡し、自分はど
うやら病院の一室にいるらしいと結論付ける。

自分の人生は昨夜一転した。愛する家族が目の前で殺され、黒魔
術めいたことを殺人鬼がやったと思えば、魔王が召喚されて殺人鬼
が捻り潰す。

目まぐるしく変わっていく状況で自分はたった一つ貫くと決めた
意志があるということを手のたしか魔王が令呪といていた三匹
の蛇が絡み合っている刺青が思い出させる。

「君にはこれから二つの選択肢があるんだけどいいかな？ 一つ目
は今夜の事を忘れて生きるということ、二つ目はこれからの聖杯戦
争に参加すること」

聖杯戦争？士郎の疑問に魔王が答える。

「マスターとサーヴァントの二人の七組で万能の釜である聖杯を争
う戦争、その男はマスターなんだけど一応生かしてある今なら士
郎くんに変更できるんだけど、どうかな？」

龍之介を指差しながらの提案に士郎はしばし考え込むが、先程ま

での怯えていた顔を覚悟を決めた顔に変え、答える。

「そいつみたいなのがいてもしれないなら俺はそいつを止めるし、勝って父さん、母さん、姉ちゃんを生き返らせてもらおうようにする。だから俺は戦争に参加する、お願いしますマスターにしてください」

「そっか……わかった。僕はキャスターのサーヴァント紗伊阿九斗、これよりマスターの拳となり立ちはだかる敵を打ち砕こう、聖杯はマスターに捧げるため尽力しよう。」

阿九斗は片膝をつき忠誠形を取る。そして顔上げると、

「あーそれとゴメン。最初に謝っておくと僕、細かい魔術は苦手なんだ、だからちょっと令呪を移すのは痛いかもしれない」

かなりすまなそう顔をしながら龍之介の腕ごと令呪を取り出し始めた。

それを見た士郎が魔王のちょっとはシャレにならない、間違いないヤバい、いつか逢いまみえるかもしれない『この世全ての悪』であるう麻婆豆腐よりもヤバいなどと考えているうちに阿九斗が令呪をむしり取り終える。

「ちょっと我慢してね」

阿九斗の言葉を聞き終えた直後、士郎の意識は落ちた。

ギーと病室のドアが開く音がしたので、太郎が振り向くと、学生服の上に黒のコートを着ている十七ぐらいの青年が紙袋を二つぶら下げて病室に入ってきた。

昨夜の魔王、キャスターに似てはいるのだが、神々しさを感じさせるまでの黒い王気（英雄王風にオーラ）を出していないし、何より牙も三対の翼も生えていない。

そうか魔王であるキャスターには人間形態があるのかいやそれとも人の皮を剥いで被っているのかなどと太郎は推測し始める。

「もう起きて大丈夫？ 僕も細かい魔術操作できれば良かったんだけど痛まない？」

太郎の体調を気にする阿九斗だが、太郎の不思議そうな顔を見て、ああと納得して容姿についての説明をする。

「昨夜のは覚醒状態だったからね、今は平常時だから普通の人と変わらないよ」

太郎が説明をして驚くだろうと予想する阿九斗だが、

「カッター、サーヴァントって変身するのか？ それともキャスターだからなのか？」

ペンギンのかき氷機を見つめる騎士王のごとくキラキラと目を輝かせながら質問してくる太郎に阿九斗は戸惑う。

生前、一部の例外を除いて恐怖の対象でしかなかった魔王の力に

このような反応をされるといっのに慣れていないのである。

「いや今回の七人サーヴァントで変身するのは僕だけだと思うよたぶん…… それに変身は聖杯からバックアップでもクラススキルでもなく、保有スキル、どっちかという之宝具によるものだから」

「聖杯からのバックアップ？ クラススキル？ 保有スキル？ 宝具？」

聞き慣れないワードをオウム返しにする士郎に阿九斗がゴメン、ゴメンと言いながらワードの説明を始める。

「つまりサーヴァントってのは神話の英雄とかでキャスターの他はセイバー、ランサー、アーチャー、ライダーにえーと…… 後なんだっけ？」

「バーサーカーにアサシンだよ。 たまに例外がいるらしいけど、他にわからない事ある？ 大丈夫なら僕のステータスをみてもらえるかな、念じればできると思うから」

サーヴァントやクラスについての説明を終えた阿九斗は士郎に自分のステータスを見るように促す。

「あっ！ ホントに見える！」

見えたのに驚く士郎は阿九斗のステータスを読み上げ始める。

「クラス キャスター」

マスター 士郎

真名 紗伊阿九斗

属性 秩序・悪

筋力 D

えーとゴメン漢字が読めない」

「筋力の下は恐らく耐久、敏捷だね、他に読めない所あったら言うてくるかな」

「そのたいきゆうがE

びんしょう D

魔力 A++

幸運 E

宝具 A++ってなってるけどこれってすごいのか？」

ステータスを読み上げた士郎が小首を傾げながら尋ねる……が、
ぐうーとお腹をならせる。

「小腹がすいたくらいなら、ゴルビーのポテチン一応士郎くんの家
から着替えやいくらかのお金といっしょに持ってきたけど食べる？」

「うーん…… 新都の方ならレストランあるからキャスターもいっ
しょにそこで食べよ」

そう言っって病院服を脱ぎ、阿九斗の持ってきた服に素早く着替え
ると病室を走っって飛び出す。

廊下から「早く、早く」

と士郎の急かす声が聞こえ、阿九斗は思う。

士郎君は強いな…… 事件があつてまだ一日もたつていないのに、それとも聖杯を手に入れられれば家族が還つてくるということが彼を支えているのか、どちらにしても負けるわけにはいかないな。

そう心に決め士郎を阿九斗は歩き出した。

マスターそしてサーヴァント互いに覚悟を決めキャスター陣営の聖杯戦争が始まる

意志（後書き）

オマケステータス

クラススキル

陣地作成 B

キヤス子のようなトラップ魔術ではなく魔獣がひしめく魔王城
道具作成

細かい魔術操作が無理なため基本的に不可能、出来ても金粉シヨ
ーが限界

書き終わられれば日曜にでも更新するつもりです

ライダー（前書き）

誤字脱字が割と多いかもしれない、申し訳ありません

試験終わったら直します

ライダー

冬木市の新都に食事をしようとしてきた士郎と阿九斗だったがライダーとそのマスターに出会うということが発生し、さらに予想外だったライダーと一緒に食事をという提案によって二組は喫茶店に向かった。

ライダーのマスターはかなり嫌がっていた、だがそれは当然と言える、アサシンに諜報で勝るサーヴァントがないのと同じようにマスターは策謀を巡らせるという点に置いて他の追隨を許さないのだが……

今回のマスターである阿九斗は策を巡らせるという事が基本的でない、別に頭が弱いという訳ではない（というより頭脳面では今聖杯戦争トップクラス）なのだが、いかんせん畏があるなら畏ごと消し飛ばすといった性格である、とまあ完全にライダーのマスターの心配は杞憂なのだ。

話が時間に追い付き現在マスター及びライダー陣営は喫茶店アーネンエルベで食事をとっている、他にバフチンという喫茶店があったのだが阿九斗提案によって止めた。

「マスターこのサンドイッチ美味しいぞ、あっライダーのマスターのポテトちょうだい」

ライダーの陣営に出会った頃は他のマスターは龍之介のような人間と警戒心MAXな士郎だがライダーとそのマスターの主従漫才を見てるうちに警戒心が消え去り今のようにポテトを催促したりしている。

「マスターとか色々問題あるからそう呼ぶな！ 僕の名前はウェイバーだ。あと、ポテトはやらん」

ライダーのマスター、ウェイバーも士郎に魔力を感じないため、恐らく数合わせのマスターなのだろうと思いき警戒を解いている。

「ちえーケチ、まあいいや俺は士郎。そっちのデツカいおじさんは？」

とりあえず士郎も自己紹介をする。

「うむ！ 良く聞いた小僧、余は此度ライダーのサーヴァントとして参戦した征服王イスカンダルである！！」

「こんのオ馬ツ鹿がああ！！」
べしつとただのデコピンを真名を明かしてしまったライダーに掴みかかるうとしたウェイバーはくらい悶え転げる。

「なあキャスター、イスカンダルって誰だ？」

「この時代からは大体千年程前の大王だね。なんでも東方遠征をやっていたことから征服王とも呼ばれるらしい」

「王様！？ じゃあキャスターと一緒にだね！」

「ぬお！？　なんとキャスター貴様も王であると言っのか！？」

ウェイバーが倒れたのを華麗にスルーする阿九斗と士郎の会話にライダーが驚きの声を上げる。ついでにウェイバーもキャスターの真名の手掛かりを得ようと床に転がりながらも聞き耳を立てている。

「さて、僕が最後だね。　キャスターのサーヴァント魔王紗伊阿九斗宜しく」

爽やかな笑みを浮かべ阿九斗が真名をまるで問題ないかのようにバラす、それを聞いたウェイバーは床から飛び上がる。

「なんで策謀巡らすキャスターが、うちの馬鹿みたい真名バラしてんだよ！　てかサイアクトって誰だよそんな魔王の名前なんて知らないぞ！！」

「やかましい！！」

べしっ、本日二度目のデコピンにウェイバーがまた悶え転げる。

「全く坊主ときおったら、敵の名を聞いてうるたえるようじゃ器が知れるというものであるっ」

別にウェイバーは阿九斗の名にビビった訳ではない、というよりこの時代より更に千年の時が経った時代に生きていた阿九斗を時間軸に捕らわれないサーヴァントにしか判るわけがない。

「それにしても紗伊阿九斗といえば神を殺し、ハーレムを築いたなどで有名な大魔王ではないか！！　キャスターなどというから狡賢くしょうもない輩かと思っただがなんとも骨のある輩が召還されたも

のだ」

「キャスター、ハーレムってなんだ？ 城か？」

「いやまだ士郎くんは知らなくて良いよ…… というより座にそんな風に記録されてるだなんて……」

死んでから改めて聞かされた自分の評価に阿九斗は落ち込む。それと士郎はあと十年すれば無意識にハーレム築くから聞かなくて良い。

「さてお互いに紹介しあったところで本題に入ろうではないか。キャスター、貴様は此度の聖杯に何を願う？」

「僕自身の願いは後、士郎くんの願いを叶えた後で願うよ」

「俺は家族を生き返らせてもらうように聖杯に頼む」

ライダーの問いに士郎は凜として答える。

「なんと家族思いな、しかし蘇生という点に置いては余と同じだな、まあ余は更に其処から世界征服という野望があるがな。 どうだキャスター、聖杯がどちらの願いを聞き入れる事ができたなら余の軍門に下り、世界を盗らぬか？」

「世界征服ねえ…… 僕も男だから一度も憧れた事がないという嘘になるけど、生前でもうお腹いっぱいだから、聖杯にはゆっくりと読書する時間でも貰いたいかな」

ライダーの提案に生前の闘いを振り返り自嘲気味に願いを語る阿

九斗。

「流石は魔王！ 世界征服にすら飽きたとは、ウムなんとしても余の配下に加えたくなる。それと読書をするならイーリアスをオススメするぞ」

お気に入りの本をライダーが熱く語ろうとしようとしたところで全く話に加わっていないかったウェイバーが提案する。

「ライダーの言う軍門に下るかどうかは聖杯を得るまで後にして、ここは最後の二組になるまで共闘としないか？」

ウェイバーの提案には理由がある、昨日見たライダーの宝具を見るに優勝候補の三騎士にも負けない自信がある、それよりも対魔力Dであるライダーにはキャスターの方が脅威であり、ならばそのキャスターを自分の視界に入れておき扱う魔術などを知り尽くして闘わないしは闘わずして二組とも願を叶える形の方が好ましい。

「共闘かあ…… 僕としても対魔力の高い三騎士を一人で相手するのは厳しいからね。 悪くないけど、士郎くんはどう？」

サラツと三騎士まとめて撲ツ血k i l l 発言をする魔王には搦め手で各個撃破という考えがないらしい。

「ウェイバー達悪いやつじゃないし、別に俺も良いよ。 でも一つお願いがあるんだけど、俺に魔術教えてくれない？」

士郎の出す条件にウェイバーはしばし考える。あのガキに魔術を教えるても魔術刻印を継がせるわけでもないが、僕の編み出した血が浅くても効率によってそれを補う方法を引き継がせてやるというのも悪くない。

遠くない未来にカリスマプルフェッサーとまで時計塔に名を轟かせるウェイバーの心をこの考えは揺さぶる。

「良しいいだろう。基礎魔術及び特性に関しては僕がいくらか面倒をみよう」

「交渉成立！ やったこれで一步キャスターに近づいた」

憧れつつある阿九斗に近づいたという事で喜ぶ士郎を見てウェイバーは、ふと思う。

「キャスターのステータスを確認してもいいかな？ 後使える魔術とか」

欲張り過ぎたかと思うウェイバーに阿九斗は快く許可する。

「なっ！ 魔力値A++とか高過ぎるだろ！！ 保有スキルに自動回復Cとか心眼（偽）Bとかあるし！！」

「何を言うか坊主！ 余だって幸運値がA+に軍略がBカリスマがAではないか！！」

「幸運値と魔力値では価値が違うんだよ！ てかキャスター、カリスマA+だし」

「ぬわぁんとおおお！！ 余がカリスマで負ける日が来ようとは！！」

ライダーが床に膝をついて悔しがる。ちなみに今更だがライダーは召還されたときの鎧を着た姿で今いる、せめてもの救いは他の客

がたまたま誰一人いなくて、店長が渋くてダンディーでジョージと
いった感じの人（ちなみに阿九斗には何か懐かしい感じがしたら
しい）だったということだ。

「それと使える魔術だけど僕はあまり細かい魔術操作が苦手だから、
大味な技しかできないんだ。例えば身体強化とか回復とか空間転移
とか」

それを聞いたウェイバーの顎が外れ落ちそうになる。

「予想はしていたが流石は魔術師の英霊、空間転移の大魔術が使える
とは、ちなみにそれぞれのレベル？」

「身体強化と回復は戦闘時見せるとして空間転移は最高で範囲一キ
ロ平方辺りの数万人を転移させるくらいかな」

「一キロ…… 数万……」

阿九斗の魔術の桁に完全ウェイバーの顎が外れ口から何か漏れ出
している。

ピクリと悔しがっていたライダーが反応する。

「おいキャスター」

「ああ、これは誘っているね。 どうする打って出る？ とりあえ
ず様子見？」

「まだ聖杯戦争も序盤焦ることはなからう、とりあえず様子見とし
よう」

「了解」

ライダーは放心しているウェイバーを阿九斗に任せ、レジで会計を済ませて霊体化する。

まだ見ぬ英霊に期待するライダーのあとをウェイバーをしょって士郎の手を引いた阿九斗が追いかける。

ライダー（後書き）

士郎をウェイバーの一番弟子にしてしまったのは後悔してない……
大丈夫たぶん大丈夫

無双はなしです三竦みこれが一番素晴らしいと思うので、しかしそうなる和阿九斗の天敵はやつになるのか!?

F a t e Z e r o ヤンデレ編

ランサーの魔貌に恋してしまったセイバー、しかしランサーには女アサシンがいる、狂おしい程の愛の行く末は!!

次回完結

（予告と次回内容が異なる場合が御座いますのでご注意ください）

七騎（前書き）

サーヴァントは一騎だけ四次と五次を入れ替えさせてもらいました

阿九斗の出番は今回殆どないです……

七騎

「凄いのお！ あの金ぴか宝具をいくつ持つておることやら。このままじゃあの双槍使いも弾き飛ばすにも限界が来るぞ」

「どうかな…… 確かに戦争は数が物を言うけど、あのランサー何か狙っているみたいだし、まだ二転三転すると思うよ、しかし妙だね宝具が一つとは限らないけどアーチャーの宝具はあまりに多すぎる」

冬木大橋の鉄骨の上に腰を掛けている阿九斗とライダーとそのマスター達は港の倉庫場で行われている闘いを眺めていた。

とはいえも魔術による目の強化などできない士郎にはまるで見えないので阿九斗が士郎に状況を説明している。

「さあね、まああの宝具にも共通が在ってその類の物を自在に操るとか何かしらトリックはあると思うけど、間違いなく金ぴかはアーチャーで双槍使いはランサーだろう、これで確認してないのはバースーカーとセイバーだけか。しかしステータス見る限りだとアーチャーとランサーは大差ないが一方的だな」

割と鋭く良い線を推測するウェイバーは手足でしっかりと鉄骨にしがみつきながら目の強化を施しアーチャーとランサーのステータスの確認をする。

「僕たちは会ってないけどウェイバー達はもうアサシンに会ったのかい？ 確かアサシンは歴代のハサン・ザッバーハの誰からしいけど」

「そらそらどうした槍兵。双槍では槍が充分に振れぬか？もつと気張らぬと串刺しだぞ」

「貴殿こそ打ち出す刀剣が尽きたときが最期と知るがいい」

アーチャーの挑発を端正な顔を崩さぬままに軽く流すランサーだが内心ではかなり焦っていた。

マスターの方針により街を練り歩き、見つけ出したサーヴァントを潰して行くつもりだったが街中で現代風の装いだったアーチャーを見つけたのだが、このアーチャー大剣、長槍、戦斧に鎚など無数にアーチャーの背後から見戯の如く射出するのだ。たとえ見戯だとしても間違いなく射出される一つ一つが本物でありまともに喰らえばただでは済まない魔弾には違いない。

ランサー、宝具の使用許可と礼呪によるバックアップを行う。確かにアーチャーを仕留めろ、奴は強敵だ

マスターとサーヴァントを結ぶ礼呪による通信にランサーの内心は高揚する。召還されてから仲があまり良くなかったマスターからの援護、ならば確実に敵を仕留めようとランサーは双槍をグツとさらに力を入れる。

ランサー礼呪を持って命ずる宝具を全力で投擲せよ

その命令をすぐに理解したランサーは呪符が巻かれている紅い槍をわき腹に剣が掠るのも気にせず限界すらも越え全力で投擲する。

「穿て『破魔の紅薔薇』！！」

命令が単純にして効果範囲が狭い程、礼呪の効果は高くなる。

したがって 投擲せよ という礼呪が最大限発揮される命令により
ランサーの宝具である破魔の紅薔薇ゲイ・ジャルグはランクBにも関わらずアーチャーのランクAクラスの刀剣を弾き飛ばしアーチャーの背後の残り
聖剣、宝槍あわせて六挺展開していた空間を食い破る。

『破魔の紅薔薇』の一時的に魔力を断ち切る宝具殺しの効果により
投擲した聖剣、展開していた宝槍が消え失せる。

「小癩な!!!」

アーチャーが再び展開しようとするが最速のサーヴァントたるラン
サーがそれを許すわけがない、一瞬で間合いを詰め

「アーチャー捕ったりッ 『必滅の黄薔薇』!」

ランサーの操る短槍がアーチャーの眉間を抉り抜こうとしたその瞬
間 上空より投擲されたダークが『必滅の黄薔薇』に命中し
キーンという金属音を鳴らすとともに槍の軌道を僅かにずらす。

「ちッ!」

結果ランサーはアーチャーの頬肉を削ぎ落とすだけになり即座に追
撃の四本のダークを弾き飛ばし、その場においては鴨撃ちになると判
断し距離を取る。

スツと音も立てず髑髏の面を被った女、アサシンのサーヴァントが
アーチャーの前に降り立つ。

「御無事で御座いますかアーチャー」

「なかなかの大義であったと誉めて使わずアサシン、しかし手負いの獣は恐ろしいと言うが槍兵風情が舐めた真似をしてくれる」

傷はかなり深く頬骨すら抉ってるようにも見えるが変わらず喋る様からさほど酷くはないように思える。

アーチャーは取り出した神代クラスのものであるう霊薬を惜しげもなく抉られた頬にかけるが　　まるで始めからそうであったかのように傷が塞がらない

「無駄だアーチャー、『必滅の黄薔薇』によってできた傷は治すことはできない」

わき腹から煙があがっている所からマスターに治癒の魔術をかけられているのであるうランサーが『破魔の紅薔薇』を拾いながら説明する。

「ほうならば尚更のこと貴様を殺さなければならんわけだ、遊びは終わりだ槍兵さつさと去ぬが良い」

アーチャーの再び始まる射出攻撃に加わりアサシンのダークの投擲にランサーは先程以上に苦境に立たされる

「はああああああああ」

突風の如く現れた白銀の鎧を纏った少女は迫り来る魔弾を弾き飛ばす。

「セイバーのサーヴァント、ランサーに助太刀いたす」

アサシンの手出しが納得いかなかったのかセイバーはランサーに加勢する。

だがセイバーの援護にも状況は一転しない。アサシンが増えたのだ
始めた女アサシンの他にフードを被った男と小柄な男など計、十
人を越えどんどん増えている。それも全員まるで違う体系で。

アサシンのダークはさほど脅威ではないされど数の暴力というもの
がセイバーとランサーを襲ってくる。

セイバーは直感Aという未来予知に近い物を持っている、だが彼女
にも予想出来ない事が起こる。

ランサーの反撃を一転、アサシンの登場を二転、セイバーの加勢を
三転とするなら阿九斗の予想を上回る四転目が起こる。

「

」

倉庫場に響き渡る言葉にならない咆哮、間違いなくバーサーカーで
ある。

ただ普通のバーサーカーの乱入ならさして問題ないのだ、バーサー
カーとは弱小サーヴァントを狂化させることで能力を上げるクラス
なのだから。しかし現れたバーサーカーの姿を四騎の目から見ても
も弱小サーヴァントとは思えない。

身の丈は二メートル五十程、身に纏う筋肉の鎧は鋼の如し、装いは

腰布一枚に黒曜石を削り抜いた大剣、聖剣魔剣の神秘を感じさせる物ではないが歴戦の逸品であろうことが伺える。

「
」

バーサーカーは二度目の咆哮を上げ、四騎のうち特にアーチャーに殺気を飛ばし突進する。

アサシン達のうち数人は即座にバーサーカーへ対象を変更しをダークの投擲攻撃を開始する。

しかしバーサーカーの体にダークは傷一つ付けられず突進を止めることができない。まるでバーサーカーの体表にバリアが張ってあるかのようにダークは弾かれる。

バーサーカーが大剣を振りかぶった時アーチャーは秘蔵の宝具を発動させようとするがそれを思いとどめる。

声が出たのだ。東へ東へと駆け抜けた無敵の軍団を率いた英雄の雄叫びが、

「A A A L a L a L a L a L a L a i e ! ! !」

オリュンポスの至高神の化身である雄牛に牽かれた戦車が天を駆け抜け、バーサーカーへと突っ込む。

僅かばかりバーサーカーの大剣を振り落とす方が速い……しかし途中振り落とす腕が止まる、阿九斗の魔術による物である。

バーサーカーは宝具の効果故にランクAに満たない攻撃を無効にす

る、阿九斗の魔術は無効に仕切れる物ではないが万力の如き力など獅子をも絞め殺した腕には無駄と云わんばかりに拘束を一瞬で解き放つ。

されどその一瞬で踏み鳴らすことに紫電の迸る二頭の神牛の蹄はバーサーカーへと掛かる。

ランクA+を誇るライダー『神威の車輪』による蹂躞走法『遙かなる蹂躞制覇』の一撃をまともに受けたバーサーカーの上半身は消し飛ぶ。

「余は征服王イスカンドルにて、こやつは大魔王紗伊阿九斗である。王の前である、武器を下げい」

阿九斗とライダーは旋回しながら地面に降り立ち、ライダーは大声で名乗り上げる。ウェイバーは余りの速さで目を士郎と同じように回しライダーの行動を止められなかった。

いきなり真名をばらしてのキャスターとライダーサーヴァントの登場とともにバーサーカーの脱落に一同が呆気にとられた時、バーサーカーから白煙が上がる。

何事かとその場に居た全員が視線を向けた先には今しがた脱落したと思われたバーサーカーが生き返ったのだった。

この様子を見て今まで倉庫の一角に身を隠していたセイバーとともにこの場に来たアイリスフィールが叫ぶ。

「蘇生魔術の重ね掛け……まさかヘラクレス!!」

余りにも有名過ぎる名に一同に驚きが走る。それが本当ならば十二の難行を成し遂げ命のストックを十二個持っているヘラクレスは後十二の回殺さなければならぬのだ。

その上一度死因となった攻撃には耐性ができる、つまりもう『遙かなる蹂躞制覇』では殺しきれないのだ。

「ふん神の子と言えど今は闘うしか脳のない狂戦士早々に散るがよい」

そんな空気をアーチャーは破りAランク以上の聖剣、宝槍を展開し戦闘を開始しようとするが、

「お待ちください。アーチャー」

始めランサーの妨害をした女アサシンがアーチャーを止める。

「我に口出しする気がアサシン？」

「いえ私ではなくマスターひいては時臣様よりのご命令で御座います」

「あやつめ…… まあ良い興が削がれた。あとは雑種同士で戯れるがよい。それとライダー、王を名乗って良いのはこの我だけだ。他は紛いもんに過ぎん」

アーチャーはアサシンとともに倉庫場を後にする。

バーサーカーもマスターからの命令があったのかいつの間にか霊体化して居なくなっていた。

「やれやれ残ったのは余と魔王の他に伊達男とセイバーか、ふむでは早速だが貴様ら余の軍門に下る気はないか？」

ライダーは昼間阿九斗にしたようにセイバーとランサーをスカウトする。

自由奔放、豪放磊落、破天荒そんな自分のサーヴァントを見てウェイバーはとりあえず溜め息をつく。

流石に目の回りが収まり思考が戻ったウェイバーの頭はアサシンがまだ生きていたことやバーサーカーがヘラクレスだったなどでぐちゃぐちゃになっていた。

ただ一番の問題は自分のサーヴァントが勝手にまた真名大暴露をしてくれやがったことだった。

七騎（後書き）

入れ替えたのはヘラクレス、彼もまた王様だから入れたかったんで

……

ところでFate三大履いてないのうち一人がゼウスの子ってどう
いうことよ？

初戦（前書き）

阿九斗の初戦闘です

誤字などあったら教えてください

初戦

ライダーの提案をランサーとセイバーがすげなく断り、阿九斗の拳で決めるのが判りやすいという提案が用いられた所から話が再開する。

バサリと上空で羽ばたく阿九斗は土郎を地上に下ろしアサシンがまだいるかも知れないとマナ障壁を土郎の周りに展開し戦闘を再開する。阿九斗が腕を振り下ろすと轟音とともに雷の嵐がランサーとセイバーに降り注ぐ、されどセイバーは対魔力Aをランサーは『破魔の紅薔薇』をもって嵐を雲散させる。

そこへライダーの『神威の車輪』の突撃がセイバーとランサーへ襲いかかるが、ランサーとセイバーはひらりと回避し左右からライダーへと反撃に転じ。ライダーを挟撃する。

戦車の右側からの見えざる剣による斬撃はライダーのスパタで捌き左側からの双槍による刺突には空間転移で一瞬のうちにランサーの目の前に現れた阿九斗は騎竜とすら殴りあえる程の身体強化の魔術のかかった拳をランサーの腹部に叩き込むことで対処する。

追撃をとランサーに阿九斗は拳打の猛攻を仕掛けるが『破魔の紅薔薇』で受けられた拳打は身体強化の魔術が掻き消されダメージが与えられない。状況が一転し、阿九斗の力が『破魔の紅薔薇』で無効にできると知ったランサーは一気に攻勢に転ずる。阿九斗は『必滅の黄薔薇』をなんとかかわすが『破魔の紅薔薇』で腕を掌から肩まで貫かれる。

「キヤスター！」

士郎が叫ぶ。

「ふん、『必滅の黄薔薇』 ではないとはいえその腕はもう使い物にならないだろう」

「いや腕程度ならまるで問題ない」

ランサーの言葉に対し阿九斗は貫かれた腕を引きちぎる。そしてグチュリと生理的嫌悪感を感じさせる音を立て右手を引きちぎった左腕の断面に差し込む。阿九斗が断面から右手を抜くとその手には左手が絡めてありそのまま新しく左手を生やす。

その様子には闘いあっているセイバーとライダーの手も僅かに止まる。

「くッ、化け物め！」

「よく言われるよ、まあでも特に君みたいな英雄には特に僕みたいな存在が嫌いだろうね」

阿九斗はランサーの侮蔑をさしたる気にもせず、再び猛攻をランサーへ挑む。が全ての猛攻は『破魔の紅薔薇』で殺される。

「だが魔力を断つ我が『破魔の紅薔薇』の前では魔王の一撃も無きに等しい」

「確かにマナキャンセラーは僕の天敵だ。けどそれは何度も経験していることだからね、対処方法はいくらでも思いつく」

虚勢のように聞こえる阿九斗の言葉だが一つ、たった一つだけ手はある、しかし危険過ぎる賭を序盤早々にすべきかと阿九斗が悩んでいるとライダーがセイバーへ、ヒットアンドアウェイを繰り返しながら声をかける。

「あんな芸当ができるとは魔王の名も伊達じゃ無いのう、まあランサーとの相性は最悪そうだしセイバーとに替わるか？」

「今は序盤だしこの策はとって置くとするか…… 悪いけどランサーの相手は頼むよ」

「うむ任せよう！」

ライダーと阿九斗は互いに相手を替えて戦闘を再開する。

「双槍よりも優るとも劣らず、我が不可視の剣と知るが良い」
セイバーの不可視の剣により阿九斗は間合いが掴めず戸惑うが、ランサーと異なり一撃が無効にされないならばと手数を減らし右手をギチリと音になるまで握り締める。セイバーの剣戟が圧倒的なマナの壁すら切り裂き阿九斗に届くが阿九斗の保有スキルの『自動回復』が即座に斬傷を塞ぐ。三度の斬撃が終わった頃

「はあああああああああああ」

咆哮とともにセイバーが頭から切り裂かんと振りかぶった不可視の剣を振り下ろすと同時に阿九斗は溜に溜めた右手を振り抜く。

斬撃と拳打が打ち合う瞬間、阿九斗は周りのマナを掌握し強引に剣が纏っていた風の鞘を剥ぎ取る、それに僅かに動揺したセイバーは阿九斗の拳に力負けして吹き飛ばされる。

クルリと空中で受け身を取るセイバーと風の鞘に隠された秘剣をみた阿九斗、両者再び間合いをとる。

「なる程その剣！ まさかアーサー王が女性だったとは」

あまりに有名過ぎる聖剣を見た阿九斗はセイバーとの間合いを一気に詰め、剣の刃渡りを知った事でセイバーの連撃についていくことができる。

魔拳と聖剣互いのラッシュは拡大に早くなり、威力も増していく。

純粹な腕力ならば阿九斗だが相手は近接戦に置いて圧倒的なアドバンテージを持つセイバー、このままでは阿九斗は迫り負ける両者がそう思った時、

「のうう おおお おおお おおお おお！？」

「ぎちゃ やちゃ やちゃ やちゃ やちゃ やちゃ やちゃ やちゃ！！」

ライダーとウェイバーの叫び声が上がったと思ったら倉庫場の一角のコンテナが爆発を起こし、それに誘爆して彼方此方で爆発が巻き起こる。

「はああ あああ ああ」

「A A A L A L A L A L A L A L A i e」

阿九斗に替わりライダーがランサーの相手をしている。この二人さ
して得手不得手の間では無い。それ故にライダーの『神威の車輪』
による突撃そしてその瞬間におけるライダーのスパタとランサーの
双槍交差による戦闘となる。武器による戦闘は圧倒的にランサーに
分があるが、突撃を仕掛けるのはライダー故にライダーはタイミン
グを自在に計ることができる利がある。

召喚されて当初マスターに本当はお前ではなく征服王を呼び出
すつもりだったと愚痴をこぼされたことがあるランサーは、ならば
ここは己の双槍をもって征服王の首を獲ることでマスターに認めて
貰おうと果敢に双槍でライダーを穿とうと挑む。

一方ライダーは屈服させれば己の軍門に是ほどの猛者が加わるのか
と気を高ぶらせ左手で手綱を握る戦車を再びランサーへと向ける。

「余の勝利の暁には軍門に下るとの誓い忘れるでないぞランサー！」
再度の確認とともにライダーが紫電を迸らせ稲妻の如く墮ちてくる。

「騎士たる俺に二言無し、されどそれは貴殿の勝利の話、悪いが
此の勝負貰った！ 『破魔の紅薔薇』！！」

紅き一閃が天へと昇る。

『破魔の紅薔薇』ゲイ・ジャルク は一時的に魔力を断ち切る効果により『神威の車
輪』ス・ホイール の紫電の壁を突き抜けライダーへと迫る。

されど騎乗の英霊たるライダーにとって狙撃から防衛は馴れたもの
とスパタで僅かに弾道を逸らし紅き一閃を回避する。

だがランサーにとってライダーが『破魔の紅薔薇』を逸らすのは想定内、真の策は次の一手にある。

『掛かった！』『必滅の黄薔薇』！！』

『破魔の紅薔薇』の投擲直後に全く同じ弾道で完全に死角となっている所に『必滅の黄薔薇』を投擲する。

それ故ライダーが紅き一閃を逸らした瞬間に思いもよらぬ新たな黄色の一閃が眼前に現れる。ライダーは迫り来る魔弾を必死に回避しようとするが『必滅の黄薔薇』に左腕を貫かれる。手綱を操るライダーの左腕を穿たれた戦車はコントロールを失い落下する。

「ライダー！？ 前だ！ 前！！ 前ええええええええええええええええ！！」

ライダーがスパタをしまい右手で再び手綱を操ろうとすると、殆ど意識が飛びかけていたウェイバーが絶叫する時には戦車はコンテナの一つに突っ込んでいた。

コンテナの影から戦闘の様子を見ているセイバーの真のマスター衛宮切継は今後どうするか算段を建てる。アーチャーとアサシン、ライダーとキャスター、この二組は間違いなく同盟を組んでいる、ならば今ランサーのマスターを手元にある銃で狙撃して孤立するのは巧くない。かといって全サーヴァント中最も不安定なクラスである

バーサーカーと組む気にはならない。ならば確約せずともランサー陣営と共同戦線をとというのがベストと結論を下す。

そんな切継の元に電話がかかってくる。切継の部下である久宇舞弥からである。

切継！ 撤退を！！

どうしたんだ舞丫 ドオオオオン！ ライダーが爆発物を格納していたコンテナの一つに突っ込み誘爆gドオオオオン！

普段の冷静な舞弥とはかけ離れた連絡に切継は応答しようとするが舞弥の無線との連絡が爆発により妨げられる。

「全くなんてことだ……」

切継は倉庫場の彼方此方で起こっている爆発を確認する。このまま続行は不可能と判断し切継は取り敢えず閃光弾でも打ち上げることにした。

「セイバー撤退するわ！」

事前に切継と決めていた閃光弾が打ち上げられたのを見てアイリスフィールはセイバーに声をかける。

「わかりましたアイリスフィール、キャスター悪いが今日は退かせ

てもらおう」

セイバーはサツとアイリスフィールドを抱き上げ倉庫場の彼方此方で起こる爆発の間を抜けてコンテナを踏み越え即座に離脱する。

「士郎くん僕らも一旦戻ろうか？」

生前、基本的に爆発を起こす原因は自分だったため他人が起こした爆発に真新しいものを感じる阿九斗は士郎の周りのマナ障壁を解き抱き上げ再び空を舞う。

七騎が集まるといふ異常な初戦がこうして幕を閉じる。

聖杯戦争の状況

真名がばれているサーヴァント

アサシン

ランサー

バーサーカー

ライダー

キャスター

セイバー

負傷状況

アーチャー・頬の抉り疵

ライダー・左腕

同盟

アーチャーとアサシン

ライダーとキャスター

セイバーとランサー（あくまで状況的共同戦線）

被害

倉庫場一帯爆破

初戦（後書き）

阿九斗の天敵はランサーでした
てかランサーが宝具の乱発、いいのか？

大きな見せ場は幾つかライダーにも作る予定（対ヘラクレスとか）
です。 兄弟喧嘩ですけどね……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3555t/>

いちばんうしろの聖杯戦争

2011年10月8日11時54分発行